

## 硝子の浣腸器

午前中の家事が大方済んで、裕子は夕食の準備のため、マーケットに買い物に向かいました。主人が好むお漬物やお魚を求めた後、薬局に寄って切らしていたハート印の浣腸薬と脱脂綿を買って帰りました。

今年六月、四十の歳を迎えた裕子は、体調の変化もあつてこの三日間お通じがありません。食事の支度の前にお通じをつけてしまおうと、お部屋で浣腸し時計を見ながら5分間我慢してお便所に急ぎました。

二つの浣腸と三日ぶりの排泄の快感に、熟れた身を委ね悶えたのです。

裕子は便秘して浣腸する度に、実家で母と暮らしていた日々が思い出されます。

「実家にあつた薬箱の中の硝子の浣腸器！ あれは誰が使ったのでしょうか？ 母が私にお浣腸する時は、何時もイチジク浣腸ばかりで、あの浣腸器でお浣腸されたことはなかったわ。あの大きい浣腸器は大人用だったのかも知れない。そうッ！ それで思い出したッ！ 多分あの時に使われたんだわッ！」

## 母のお便秘浣腸

あれは私が中学生の時でした。

母が高いお熱を出して近くのお医者さまに往診に来てもらった事がありました。

母の事が心配で障子に付いたガラス窓から覗いていると、母は重いお便秘だったらしく、お医者様に大きな浣腸器で何度もお浣腸されました。

母はそれでたくさんのお便を出されたのです。

お医者さまは母の出したお便を調べ、浣腸の道具をしまった後で、お腹を押して診察しながら母に説明していました。

「浣腸一度しただけでは便秘の習慣は解消しませんよ！ しばらくの間はご家庭でも浣腸して、お通じの習慣をつけるようにしてください！」

先生はそう言っただけで帰られたのです。

きつとあの時以来、母のお便秘にあの硝子の浣腸器が使われたのだと思います。

## 母の寝室浣腸

思い出してみると、母が便秘してお医者さまにお浣腸された後、お通じの習慣をつけるため、時々浣腸するように言われていました。

母はお便秘の度に夜の寢床で、父の手でお尻を開けられて、奥の肛門にあの硝子の浣腸器でお浣腸されたのでしよう。

そして父の前でお便をいっぱい出されたのでしよう。

それは多分、私達子供が寝てしまった後に、母は台所で浣腸液を作ってお部屋に行き、父の前に大きなお尻を出して肛門を広げられ、あの硝子の浣腸器でお浣腸をされていたのです。

そして母は、排便の恥ずかしさに泣きながら、父の前で便器いっぱいのお便を出していたのだと思います。

そういえば夜中にオシッコに下のお便所に行った時、母の忍んだ泣き声を聞いた事がありました。

なんだろうと階段の上からのぞいていると、母がお浣腸で使う便器を持ってお便所の方に歩いて行きました。

その時“お母さんは、お父さんにお浣腸されたのだ！”と強く感じた事を覚えています。

## 裕子の思い

今は結婚して子供の母親にも歳なり、歳と共に酷く便秘するようになって、主人にお浣腸してもらう今の自分に置き換えてみると、あの時母はお浣腸が済んだ後で、恥ずかしさに父に甘え、抱かれて愛されながら、声を忍んで鳴いていたのだと私は思うようになりました。

妻の身になった裕子は、お浣腸される母の気持ちや自分の事のように分かるようになったのです。裕子はその情景を想像する度に母が父から“愛情浣腸”を受けている姿が見えるようで、そのエロチックな光景が自分の日常に反映され、とても愛おしくまた恥ずかしく感じてしまうのです。

## 肛門検温

そういえば母の薬箱には硝子の太い体温計も入っていました。あれも母に使われたのでしょうか？母が父の手で肛門に体温計を入れられている姿が目には浮かびます。

私たち姉妹がお熱を出すと、母はあの体温計を使って肛門検温されたものです。朝に熱があると言つてぐずぐずしていると、

「あなた達！ 肛門の検温はごまかしが効かないのよ！ お尻出してッ！」

お浣腸の時と同じ姿勢で、体温計をお尻に入れたのです。

体温計は油断すると自然に抜け出てきます。

抜け落ちたりすると、おしりを叩かれてまた深く入れられ、今度は時間まで体温計の頭を押さえられます。

もしお熱があるとそのままイチジク浣腸をされ、便器に排便させられて便の量を調べられました。それが母の時代の家族の健康管理の方法だったのです。

その時に感じた肛門感覚と被虐的で暖かい情景は、母の思い出と共に、今も忘れられません。

でも、あの懐かしい硝子の浣腸器や瑠璃の差込便器は、どこに行ってしまったのでしょうか？

最近では、あの浣腸器も差込便器も薬局にも見られなくなってしまいました。

そういえば、実家の母のあの古い薬箱はどうなっているのでしょうか？ もしかして…？

実家を継いだ郁代姉さんがお便秘した時…

あの硝子浣腸器と体温計が、姉さんのご主人の手で今もお使われているのかもしれない…？

次の法事で実家に帰った時に、あの薬箱が在った部屋を見てみようと裕子は考えたのです。

